

10. 「東亜同文書院に関する発表論文の動向」

武井 義和

藤田 最後は、現在われわれのやっている東亜同文書院大学記念センターのポストドクターの役割をしていただいております、長く中国研究科にいて、昨年、中国研究で博士号の学位も取りました武井先生です。テーマは「東亜同文書院に関する発表論文の動向」です。この要約は年報のほうにも一部載っておりますので、ご参考にしていただければ幸いです。それではよろしく。

武井 愛知大学東亜同文書院大学記念センターの武井と申します。よろしくお願いたします。いま藤田教授から演壇の真ん中で発表せよというご指示がありました、皆様と同じ場所で失礼させていただきます。

今回の私の報告は、戦後日本において発表された東亜同文書院に関する研究の動向を概観することを試みるものです。この東亜同文書院は、そのルーツを1890～94年まで上海に存在した日清貿易研究所に求めることができます。また、東亜同文書院を考える場合には、その経営母体でありました東亜同文会の実態も無視できません。しかしながら、すべてを含めて論じますとまとまりがなくなりますので、本報告では東亜同文書院を中心に述べることにいたしまして、日清貿易研究所ならびに東亜同文会は東亜同文書院に関する範囲内で扱うことにしたいと思います。

まず戦後日本において発表された研究数を、論文を中心に見ていきたいと思います。この数は、東亜同文書院を中心とする研究、および東亜同文書院に言及しているものを対象としておりまして、論文の再録なども数えております。ただし書評の類は除きました。それに際して引用した資料類につきましては、お手元のレジュメにある最後のページの注2をご覧ください。

さて、戦後日本における研究の流れですが、

1945年以降、1950年代までは、東亜同文書院に関する研究は存在していません。1960年代半ば、正確には1965年ですが、この年に竹内好という中国文学者による「東亜同文会と東亜同文書院」という論考が初めて登場します。1960年代においてはこの1本だけですが、以後70年代に論文が3本発表されました。内訳は学術誌収録2本、図書収録1本です。ですが、この図書収録は竹内の論文の再録ですので、論文数は実質的には2本だったこととなります。80年代には論文6本となり、内訳は学術誌3本、図書収録3本という推移をたどります。しかし、90年代になると増加して、論文27本、内訳は学術誌収録13本、図書収録14本、そして研究書5冊を数えます。2000年代には論文24本、内訳は学術誌23本、図書収録1本を数えます。研究書は2冊です。

このように、東亜同文書院に関する研究は1960年代に初めて登場して、以後少しずつ増加傾向を見せました。しかし、全体的に見た場合、特に1990年代以前は研究が少なく、逆に90年代以降は増加しています。特に90年代は、論文数と書籍数が各年代を通して最多です。したがって、東亜同文書院研究史のうえで節目の年代と位置づけることができます。

では、その研究動向の変遷について述べていきますが、紙面の関係もありますので、主な研究のみを扱うことにしていきたいと思います。端的に述べて、1980年代末までは中国侵略の枠組みで書院を論じる性格が強かった。たとえば大森史子氏が書いた「東亜同文会と東亜同文書院—その成立事情、性格および活動」という論文では、同文書院生の大旅行後に提出した『調査報告書』、そしてそれを基に東亜同文会から出版された『支那省別全誌』の内容的価値は非常に過小評価されて

います。

また、六角恒廣氏の論文「東亜同文書院の中国語教育」では、1945年までの日本における中国語が、日本人が中国で政治、経済、軍事などの面で活躍しようとするための中国語であったという認識の下、東亜同文書院の中国語教育を日本の中国への国家的進出という枠組みで論じています。もっとも竹内好の論考は、東亜同文会と東亜同文書院の成立についてわかりやすく述べておりますし、阿部洋氏の「東亜同文会の中国人教育事業」というタイトルの2本の論文のように、東亜同文会が行った、たとえば同文書院中華学生部などにおける中国人教育事業について、その変遷を実証的に明らかにしているような研究もあります。けれども、1980年代末までは全体的に見て、東亜同文書院、またその特徴を否定的に結論づける傾向が大きいように思われます。

こうした認識の背景として、戦後日本における中国近現代史研究の分野で、近代日本の中国・アジア地域への侵略に対する反省が意識されてきたこと、そして、戦前の調査・研究の多くが批判の対象となったといわれていますが、そうしたことと無関係ではないと思われます。

しかし、1990年代に入りますと、東亜同文書院研究は大きな転機を迎えます。この背景として、80年代末から90年代初頭にかけて生じた冷戦の崩壊が挙げられます。これにより、たとえば日本の中国近現代史研究において、革命に対する見直しが行われるようになったといわれるように、従来の歴史像も大きく見直されるようになってきました。

1990年代以降の東亜同文書院研究の増加は、このような歴史研究の変化と深い関係があるように思われます。同時に、東亜同文書院についての見方にも変化が表れてきております。特に、本日コメンテーターとして参加されております栗田尚弥先生が、1993年に『上海東亜同文書院 日中を架けんとした男たち』というご著書を出されま

したが、このように東亜同文書院にかかわった人物の軌跡を明らかにして再評価する著作が登場しております。これは特筆すべきものであると思います。

また、大旅行研究を通じて『調査報告書』の価値を見出し、『調査報告書』や『大旅行誌』を用いて大旅行の全容を解明している藤田佳久教授の一連の研究は、1987年に発表された「中国・福建省ノート 東亜同文書院学生の「旅行日記」記録の分析との関連で」という論文が最初ですが、それから現在まで、東亜同文書院に限定した論文だけでも13本、研究書は5冊を数えております。藤田教授は、大旅行の側面から東亜同文書院を再評価するとともに、実証的な研究を進めておられます。

ほかにも佐々木亨氏や松谷昭廣氏のように、東亜同文書院に派遣された学生、各府県から派遣された学生を扱った研究などもあります。佐々木先生や松谷先生の研究は、各府県から派遣された学生、県費生をめぐる府県の動向を分析する試みなど、従来では見られなかったような視角が登場しています。

このように、東亜同文書院の実態を解明する動きが表れてきております。したがって、90年代以降は中国侵略という否定的な結論に持つていく研究よりも、東亜同文書院を明らかにしようとする実証的な研究、そして客観的に同文書院をとらえる研究が登場してきていることが窺えます。この現象は、戦後半世紀を経てようやく東亜同文書院研究が史実をベースに本格的に開始されるようになったことを意味すると同時に、研究者が各自の問題意識、関心を持って研究を行い始めたことを意味するものと思われます。戦後半世紀を経て、ようやく東亜同文書院が学問的に取り扱われ、議論される時期になったといえるように思われます。

では最後になりますが、今後の研究の展望と課題について、若干述べておきたいと思います。細



かく見ていくとたくさんあるのですが、時間の関係もありますので、1～2点に留めさせていただきます。

まず東亜同文書院の初代・第3代院長を務めた根津一思想である「根津精神」についてです。この根津一の考え方の基本には「王道論」というものがあり、こうした思想が同文書院生や書院関係者によって「根津精神」として語り継がれたといわれています。しかし、深く掘り下げて、根津精神をさらに解明すると同時に、根津院長と他の同文書院長の思想の比較研究を行うことなども、今後の研究の課題であるように思われます。

また、東亜同文書院で学んだ学生は日本人が主体でした。中華学生部が存在した時期には、そこに中国人も在学した時代があるのですが、もっぱら日本人が主体でした。ですが、日本人学生という場合、彼らの中には、当時日本の植民地統治下にあった台湾人や朝鮮人も含まれていました。管見の限り、彼らに関しては、たとえば学術論文のような先行研究はいまのところ見当たりません。しかしながら、東亜同文書院に学んでいた台湾人や朝鮮人についての研究は、東亜同文書院を多角的にとらえる場合の重要な視点の一つになりうるのではないかと思います。

さて、歴史研究を行うには、やはり資料が必要不可欠です。愛知大学には、『調査報告書』や『大旅行誌』をはじめとして、東亜同文書院に関する資料がたくさん保管されています。しかし、今後の東亜同文書院研究は、日本国内に存在する資料のみならず、主に中国や台湾といった海外にも散在する資料をも網羅していく必要があると思います。同時に、東亜同文書院で学ばれていた方々への聞き取りも実施していく必要があると考えます。そして、今後実証研究を進展させると同時に、東亜同文書院が存在した意味を、日本およびアジア、さらには世界の中で改めて問い直すことが求められるものと考えます。

以上で私の報告とさせていただきます。ご清聴

ありがとうございました。(拍手)

藤田 どうもありがとうございました。ただいまの発表は、戦後を中心にして、日本の中での書院をめぐる研究史の動きを、大きく1990年代以前と以降の二つに分けて、とりわけ90年以降は実証的な研究をベースにして進み始めた。それ以前はイデオロギー的な研究で、結論が先にあった。私が言うとおかしいのですが、そういう研究が非常に多かったのではないかと。そういう大きな動きがあるというお話でした。併せて、今後の研究課題も提示していただいたということです。少し時間がありますが、何かご意見等ございますか。事実関係の質問はありませんでしょうか。

百瀬 私の父が25期で東亜同文書院を出ています。それで関心を持って話を聞いたりしていますが、今年2月18日から半月ばかり中国の上海に行って、交通大学を見てきました。しかし、中に入って建物などを見て来なかったのが、来年こそは中に入ってしっかり見学してきたいと思いますが、どういうところをしっかりと見てくればいいのか。そのへんをお願いしたいと思います。来年は北京オリンピックがありますから、混んだりして見られない。その次には万博がありますね。そういう関係で、北京オリンピックの前に行ったほうがいいのか、あとに行ったほうがいいのか、タイミングはどうか。

それと、直接日中には関係ありませんが、長野県の信濃毎日新聞に「理工系豊富な人材、知財権侵害ハードル、製品開発・中国拠点」ということで、「日本の大手企業、マイクロソフト、インテルなど大手企業の建物が並ぶ上海市の郊外に東京ドーム七つ分のキャンパスが広がる。江沢民前国家主席の母校として有名な上海交通大学。理工科系の名門で、アメリカマサチューセッツ工科大学など海外に留学する学生も多い」ということが書いてあります。こういうことについてわかっていることがあれば、話をしてもらえればありがたいと思います。上海交通大学の内容ですが。

藤田 いまの議論の道とは少しずれていますので、このご質問に関しては全体が終わってから、交通大学の方に最近の状況を少しお話しいただくとかたちにしていただきたいと思いますので、またあとでお願いします。ほかにいかがですか。

質問者 武井先生の今後の研究の展望と課題というところで、第一点として、根津一先生の「根津精神」ということをおっしゃって、根津院長とほかの院長との思想の比較ということを新しい研究のテーマとして指摘されました。私は九州の出身で、大内暢三先生が院長として勤められたこともあります。思想の比較ということで、共通点と相違点をお考えだろうと思います。もしあるヒントでも与えていただければと思ひまして。大内先生との間における共通点、あるいは相違点について、何か先生のお考えがあれば披瀝していただきたいと思ひて立ちました。以上です。

藤田 ありがとうございます。根津先生と大内先生ですね。両方とも院長で、それぞれご活躍された方ですが、お二人の共通点、あるいは相違点というご質問です。

武井 ありがとうございます。思想比較ということをお願いしましたが、私は、東亜同文書院の運営に対する取り組み、中国に対する見方などを、歴代院長と根津院長の思想の比較の一つの手段として考えました。

根津院長と大内暢三院長との類似点、相違点ですが、お恥ずかしいことに、私はこれから研究を深めるところです。あまり正確なお答えができないかもしれませんが、根津院長は日中友好を考えていたということが、まず言えると思います。大内暢三院長は、1930年代の半ばぐらいまで同文書院院長を務めていたのですが、ちょうどそのころ1932年に第一次上海事変が起きます。このときに同文書院の学生も義勇兵として参加せよという指示が、居留民団のほうから圧力が出たということもいわれていますが、大内暢三院長は、そう

いうことは許さなかった。学生たちを引き上げさせて、同文書院が日中間の戦闘行為に巻き込まれることを極力避けた。学生たちが戦闘に巻き込まれたり、参加することのないようにと考えていたと思います。そういう点からすると、日中間の関係は安定したものであるべき、友好的な関係であるべきという点では、根津院長と大内院長は共通していると思います。

もちろん根津院長と大内院長の間には考え方の違いもあると思ひますが、それについては今後研究を深めていきまして、またあらためてご報告させていただければと思ひます。

藤田 ちなみに大内さんは、近衛篤磨の秘書長みたいな役割をずっとされていた方でした。今後の彼の研究に期待したいと思ひます。あといかがでしょうか。

堀田 財団法人霞山会研究員の堀田と申します。いま武井先生のご報告を拝聴し、非常に感激いたしました。霞山会は東亜同文会の継承団体ということで、東亜同文会、東亜同文書院大学等の資料の所蔵もありますが、戦後、愛知大学に霞山文庫というかたちで寄贈しまして、当会でも所蔵している資料は少なく、欠号も多くなっています。それで、当会から以前『東亜同文会機関誌総目録』というものを発行したのですが、その中でも欠号になっている『東亜時論』とか、現在一部確認ができない雑誌等があります。現在こちらの東亜同文書院大学記念センターのほうでは、過去の東亜同文会ならびに同文書院大学が発行した刊行物、パンフレット等を、網羅的に収蔵、収集、収録の活動は行っていらっしゃるのでしょうか。資料収集に関する取り組みが具体的にありましたら教えてください。

武井 ありがとうございます。東亜同文書院に関する資料の収集という点ですが、同文書院で学ばれていた方々、そのご遺族の方が、ときどき記念センターに資料を寄贈するというかたちで下さいます。書籍や写真類、そして若干ですが文書類

などがあります。この書籍類ですが、東亜同文書院に在籍していたころに実際に使っていた中国語の教科書とか卒業アルバム、あるいは戦後ご自分の関心に基づいて購入して読まれたような比較的新しい本などもあります。そういった書籍類が比較的多く寄贈されています。

書籍について一言付け加えますと、同文書院28期生に蔵居良造さんという方がいらっしゃいました。この方は同文書院を卒業されてから朝日新聞社に就職されたのですが、その方の蔵書が現在熊本県のご実家に大量にあります。正確な数はわかりませんが、数千冊あります。8月中旬に藤田教授と私ともう一人のスタッフの3人で、この図書を受け取りに熊本県まで行ってまいります。このようなかたちで、同文書院で学ばれていたご本人、ご遺族から定期的に資料の寄贈を頂いております。

藤田 少し付け加えますと、卒業生の方からの寄贈本が1万冊を超えております。それから、雑誌に関しましては、先ほどおっしゃっていた『東亜時論』等、本学のほうにも全部揃っているわけではなく、欠番が結構あります。それに関しては、図書館の成瀬さんに積極的に収集していただいて、完璧を期そうということで大きなデータベースを作成中です。したがって、今年度中に基本的な雑誌文献の、特に目次に関しては、成瀬さんを中心にしてデータベースが完成します。そうする

と、研究がずいぶん進んでいくのではないかと期待しております。ちょっと補足させていただきました。成瀬さん、何か言うことがありますか。

成瀬 図書館の成瀬と申します。私のほうは収書係をしておりますので、現在欠号になっているものは積極的に入手するよう努めています。本当にうれしいことに、『支那写真講義』の1～12巻を昨日ヤフーオークションで入札できました。幻の資料でずっと探していたのですが、昨年、普通の古本屋ではなく書画骨董屋さんで第8号だけ見つけました。それは8号だけだったのですが、3万5000円のところを3万円にまけてもらって収蔵したんです。そうしたら、昨日のヤフーオークションでは揃いで何と3250円。素晴らしい価格で落札できました。

そのほかに『華語萃編』の1～4で欠けているのがありましたので、それを揃いで入れたとか、『清国通商総覧』は最初あったのですがいつの間になくなってしまって、それを補ったというようなことを常にやっております。以上です。

藤田 ときどきラッキーなこともあるということです。センターとしてはデータベースを十分なかたちで作成し、提供していきたいと考えております。では時間になりましたので、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

武井 どうもありがとうございました。(拍手)

〇 総括コメント「日中関係と東亜同文書院」

栗田 尚 弥

藤田 以上、合計10人の方のご発表をいただきました。長時間にわたりだいたいお疲れかと思いますが、最後に10人の方の発表を通じて総合的なコメントをいただきたいと思っております。ご発表いただきますのは栗田先生です。正面でどうぞ。(笑)

栗田先生は、先ほどの武井さんの発表にもありましたように、東亜同文書院をもう一度きちんと見直していこうということで、そういう点では先駆的な役割を果たされた研究者です。非常に幅広く研究されておられ、コメンテーターとしては最適ではないかということで、本日お願いいたしま